九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

韓国における中学生の学校暴力の経験と要因に関する研究

都，基鳳
九州大学大学院人間環境学研究院:社会福祉開発研究院

全，宰一
大邱大学校社会福祉学部

野島，一彦
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/15678

出版情報：九州大学心理学研究. 6, pp.21-27, 2005-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2005, Vol.6, 21-27

韓国における中学生の学校暴力の経験と要因に関する研究

都　基鳳　九州大学大学院人間環境学研究院訪問研究員；社会福祉開発研究院，韓国
全　宰一　大邱大学校社会福祉学部，韓国
野島　一彦　九州大学大学院人間環境学研究院

A study on the experiences and causes of school violence amongst middle school students in korea

Giebong Do (*Visiting researcher of human-environment studies, Kyushu university; Researcher of the institute for social welfare development, Korea*)
Jaeil Jun (*Faculty of social welfare studies, Taegu university, Korea*)
Kazuhiko Nojima (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study is to prepare effective measures to successfully cope with school violence by examining student experiences of school violence and its causes. The participants were middle school students in Korea. An investigation was made into how male and female students are different from each other in patterns of violence experienced or committed and the causes of that violence. The results are as follows: 1) Students who were victims of school violence suffered more than those who committed it. For every violence pattern, male students suffered from or committed school violence more than female students. 2) The patterns of violence that students suffered from most frequently were extortion of money or goods (58.4%), followed by verbal violence (52.4%). On the other hand, the experienced school violence pattern that students committed was mainly psychological violence (49.8%), followed by verbal violence (45.3%). 3) The most common causes of school violence were social factors in general, followed by school factors, personal factors, and family factors, in descending order of frequency.

Keywords: middle school students, school violence, experiences of school violence, causes of school violence

問題と目的

韓国の学校は，近代化・産業化以後，家庭が担当していた社会化の機能が低下することによって，社会化の場としての役割がもっと重要視されるようになった。しかし，学校は，入試中心の教育課程と成績中心の競争制度に伴うストレスによって，不安と葛藤を誘発させる場所に変化しているのが実情である。特に学校暴力は，量的に増加しているし，集団化・低年齢化しており，深刻な社会問題となってきている。

学校暴力は，学校外での暴力組職との間での勢力争いなどにも関係し，その深刻性が大きいと言われている。また，学校外暴力では被・加害生徒の範囲が主に限定されているのに比べ，学校暴力は顔見知りの先輩や同級生，中退者やこれらが含まれた組職により，一回だけでなく持続的・体系的に行われるため,より深刻な現状となっている。

Gottfredson(2001)によると，さまざまな背景を持った生徒たちが同じ場所で生活する学校は，暴力，いじめ，非行等が起こりやすい場所であると同時に，それらの問題において最も影響を与えうる可能性を持った場所でもある。

韓国の刑事政策研究院(1996)によると，暴行，金品強奪，恐喝，いじめの中で，一回でも被害にあったことがある生徒が全回答者の約57%である。韓国の慶尚南道昌原市青少年綜合相談室(1997)の調査では，全回答者の32.4%が学校暴力に対して深刻であると感じているし，全回答者の53.2%が申告の時ひどく恐ろしさを感じていると答えている。

日本の場合，青少年白書(総務省青少年対策本部編，2001)によると，平成11年度に全国で発生した学校内暴力行為は，中学校24,246件で，平成10年度の22,991件より増加している。文部科学省で平成９年度から学校の内外にある暴力行為を調査した結果，平成10年度の暴力行為は全中学校の34.4%にあたる3,599校で発生している。また，学校の外で発生した暴力行為は，全中学校の19.1%にあたる2,001校で発生している(総務省青少年対策本部編，2000)。学校外の暴力行為は，学校内の暴力行為と比較すると発生件数は圧倒的に少ない。

一般的に暴力は，力，言語的攻撃，象徴的・心理的強制及び集団から弾き出すなど多様な手段を使って，心理的，身体的被害を与える行為である(Berkowitz, 1974)。

本研究では，学校内の日常生活の中で生徒たちの間に発生する有形・無形の暴力の問題行動を＜学校暴力＞とした。

学校暴力の極端な形態である生徒の犯罪は，急激に増加している。年齢別分布を見ると，18－19歳の割合は減少しているが，14－15歳の割合は大きく増加していることから，徐々に低年齢化しつつあることがうかがえる（韓国の法務研修院，1996）。最近5年間の少年犯罪の中で，生徒の割合が増加しているし，殺人，強盗，強姦，放火，性暴行など凶悪犯罪も増加している（韓国の文化観光部，1999）。このような学校暴力の問題は，個人，家庭，学校及び社会的要因が複合的に作用して発生する場合が多い。また生徒たちの間で起きていることから，深刻な問題であるし，中退，犯罪，自殺，薬物乱用など

Table 1
学校暴力の経験について

経験／類型	質問内容：学校暴力の被害経験	質問内容：学校暴力の加害経験
身体的暴力	1. 私は他の生徒から理由もなく殴られた経験がある。 2. 私は他の生徒から殴られて身体に痣や傷ができたことがある。 3. 私は他の生徒から凶器で脅されたことがある。	18. 私は他の生徒を理由もなく殴った経験がある。 19. 私は他の生徒を殴って身体に痣や傷をつくったことがある。 20. 私は他の生徒を凶器で脅したことがある。
心理的暴力	4. 私は他の生徒から冷やかされ集団から弾き出されたことがある。 5. 私は他の生徒からおちゃらかすとかあざ笑われたことがある。 6. 私は他の生徒から性的に冷やかしにあったことがある。	21. 私は他の生徒を冷やかして集団から弾き出したことがある。 22. 私は他の生徒をおちゃらかすとかあざ笑ったことがある。 23. 私は他の生徒を性的に冷やかしたことがある。
言語的暴力	7. 私は他の生徒から悪口及び呪いの言葉を言われたことがある。 8. 私は他の生徒からからかわれたことがある 9. 私は他の生徒から脅されたり脅迫されたことがある。	24. 私は他の生徒に悪口及び呪いの言葉を言ったことがある。 25. 私は他の生徒をからかったことがある。 26. 私は他の生徒を脅したり脅迫したことがある。
無理強い	10. 私は他の生徒の宿題をやらされるとかカバンを持つことを強要されたことがある。 11. 私は他の生徒に売店へのおつかいを無理やりにさせられたことがある。 12. 私は他の生徒から不良グループに入ることを強要されたことがある。 13. 私は他の生徒から試験答案紙を見せろと強要されたことがある。	27. 私は他の生徒に私の宿題をさせるとかカバンを持つことを強要したことがある。 28. 私は他の生徒に売店へのおつかいを無理矢理にさせたことがある。 29. 私は他の生徒に不良グループに入ることを強要したことがある。 30. 私は他の生徒に試験答案紙を見せろと強要したことがある。
金品強奪	14. 私は他の生徒にお金を強制的に奪われたことがある。 15. 私は他の生徒に品物を強制的に奪われたことがある。 16. 私は他の生徒にお金を貸して，後で返してもらうことができなかったことがある。 17. 私は他の生徒の表情や態度が怖くてお金や物品を与えたことがある。	31. 私は他の生徒のお金を強制的に奪ったことがある。 32. 私は他の生徒の品物を強制的に奪ったことがある。 33. 私は他の生徒にお金を借りて，後で返さなかったことがある。 34. 私は表情や態度で他の生徒たちを怖がらせてお金や物品をもらったことがある。

と密接に係わって，生徒は勿論，家庭や学校や社会全般にわたっておびただしい影響を及ぼしている。このような現状は，学校暴力の問題が，義務教育の拡大と高い進学率によって，大部分の時間を学校で過ごす青少年たちの学校生活の適応においての難しさと関係があることを表わしている。

よって，本研究は，生徒たちの間に発生する学校暴力の経験と，学校暴力の要因を把握し，学校暴力に対する効率的な対処方案を模索するための基礎資料を作成することを目的とする。

研究方法

1. 調査対象

韓国の大邱広域市に所在する中学校の性別・学校数に比例して，男子中学校10校，女子中学校10校を選び，中学校２年生783人（男子394人，女子389人）を対象に調査する。

2. 調査内容

1）学校暴力の経験について

学校暴力を５つに類型化し，学校暴力の被害経験，学校暴力の加害経験についてそれぞれ17項目を設け，５件法（１＝ない，２＝１年に１回位，３＝年に２～３回位，４＝１ヶ月に１回位，５＝１ヶ月に２～３回以上）で回答を求めた（Table 1 参照）。

2）学校暴力の要因について

学校暴力の要因について，４つの要因（個人的要因５項目，家庭的要因４項目，学校的要因４項目，社会的要因４項目）に分け，５件法で回答（１＝まったくない～５＝とてもたくさんある）を求めた（Table 2 参照）。ちなみに４つの要因は，要因分析を通して質問項目を検証し，設定された。

3. 分析方法

SPSS for Windows 8.0を 使用した。

学校暴力の経験については，学校暴力の５つの類型化別に（加害，被害）経験を集計した。また男女別にも集計し，男女差について t 検定を行った。

学校暴力の要因については，４つの要因を男女別に集計し比較を行った。

結果と考察

1. 学校暴力の経験について

(1) 全般的傾向

学校暴力の５つの類型別の（加害・被害）経験を集計

Table 2
学校暴力の要因について

類型＼経験	質問内容
個人的要因	1. 私は瞬間的な衝動を抑制することができない。 2. 私は敵対心と反抗心を他人に行動で表現したい衝動を感じる。 3. 私は学校友達の悪い行動を見て影響を受けることがある。 4. 私は性格が円満ではないと思う。 5. 私は劣等意識をたくさん感じる。
家庭的要因	6. 私は家族間の不和で難しさを持っている。 7. 私は生活上経済的に困って難しさを感じる。 8. 私は両親の無関心と誤った養育態度に不満を持っている。 9. 私は(離婚,別居,死亡,行方不明などのため)両親と一緒に住めなくて難しさを感じる。
学校的要因	10. 私は教科中心の学校生活に難しさを感じる。 11. 私は学校で成績中心の人間評価が行われること疎外感を感じる時がある。 12. 私は学校で私の人を無視されることが多い。 13. 私は私たちの学校が上級学校進学に重点を置いていると感じる。
社会的要因	14. 私は私達の社会が暴力に許容的だと思う。 15. 私は大人たちが青少年の逸脱及び非行に対して無関心だと思う。 16. 私は暴力傾向がマスコミによって影響を及ぼされると思う。 17. 私は家庭や学校の近くの有害な店が暴力と関係あると思う。

した結果がFig.1である。男女別の被害経験はFig.2，男女別の加害経験はFig.3である。これから次のようなことが分かる。

・学校暴力の経験は，被害経験が加害経験より多かった。

・学校暴力の被害経験は，金品強奪58.4%が一番多かった。次に言語的暴力52.4%，心理的暴力40.4%，身体的暴力26.7%,無理強い25.7%の順で多かった。下村(1996)は学校暴力の被害経験にあった生徒は身体的な苦痛だけではなく心理的な傷の影響も大きく，不安と恐怖，自尊感低下，他人に対する不信，不登校，自殺などの危険性を指摘している。

・学校暴力の加害経験は，心理的暴力49.8%が一番多かった。次に言語的暴力45.3%，身体的暴力24.6%，金品強奪22.1%，無理強い22.1%の順で多かった。Colivin, Tovin, Beard, Hagan & Sprague (1998)は暴力の加害者となる子どもの心理に注目している。加害者の攻撃性の高さは，そのまま適切な援助が行われず成人にとなる場合さまざまな犯罪，ドメスティック，児童虐待などにつながる危険性を指摘している。

・すべての類型の学校暴力における加害経験は男子生徒が女子生徒より多かった。

(2) 性別による学校暴力の被害経験の差

性別による学校暴力の被害経験（Fig.2）は，男子生徒(M＝1.50)が女子生徒(M＝1.29)より多いことが示された。学校暴力の被害経験は，全体の男女生徒の中で金品強奪と言語的暴力が高く現われたし，男子生徒の場合，心理的暴力，身体的暴力，無理強いの順で現われた。また，女子生徒の場合は，心理的暴力，無理強い，身体的暴力の順で現われた。

小嶋・松田(1999)は，日本の中学生を対象に暴力の加

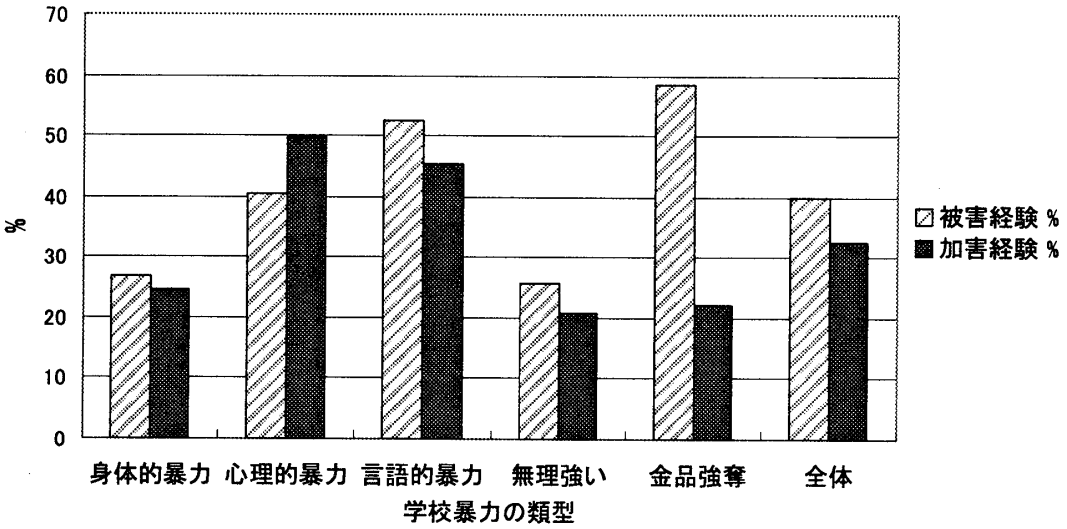

Fig.1　学校暴力の類型別による経験

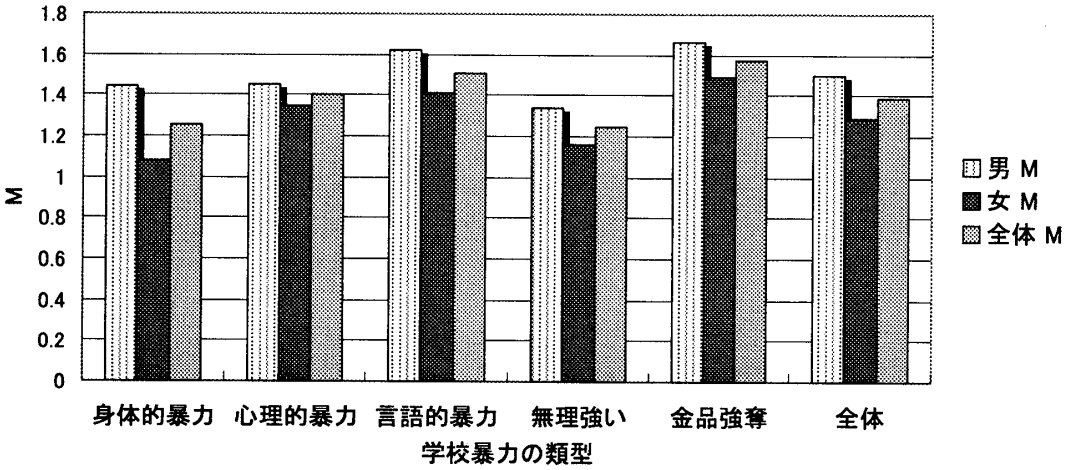

Fig.2 学校暴力の類型別による被害経験の男女差

害経験と被害経験，逸脱行為の経験を調査した結果，暴力の加害得点と被害得点で，男子生徒が女子生徒より有意で高かった。また暴力や逸脱行為に対して欲求と行動化が密接に関わること，欲求や体験が規範意識の低下と関わることを実証している。

(3) 性別による学校暴力の加害経験の差

性別による学校暴力の加害経験（Fig.3）は，男子生徒(M＝1.40)が女子生徒(M＝1.23)より多かった。男子生徒の場合，心理的暴力と言語的暴力が多かったし，身体的暴力,無理強い，金品強奪の順で現われた。女子生徒の場合，言語的暴力が一番多かったし，金品強奪，心理的暴力，無理強い，身体的暴力の順で現われた。特に男子生徒が女子生徒より身体的暴力の加害経験が高い理由は，男子生徒が緊張や不満など外部対象を通じて解消しようとする傾向が強いのに比べて，女子学生は内面化しようとする特性があると解釈される。

2. 学校暴力の要因について

学校暴力の要因は，全体的に社会的要因が一番高く，次に学校的要因，個人的要因及び家庭的要因の順で高かった。

また，学校的要因と社会的要因は女子学生が男子学生より $p<.01$ 水準で高かった。Fig.4 は学校暴力の要因による男女の平均を示す。

このような結果からは，産業化による地域社会の解体，入試競争の緊張と挫折感からくる攻撃性，マスメディアによる暴力模倣と学習，そして社会全般の有害環境などの社会的要因と入試中心の教育体系，過密クラス，学校教育の内容が知識中心に重点を置いて信頼関係形成が希薄であることなどの学校的要因が多く作用して，個人的・家庭的要因は相対的に影響力が少ないことがうかがえる。

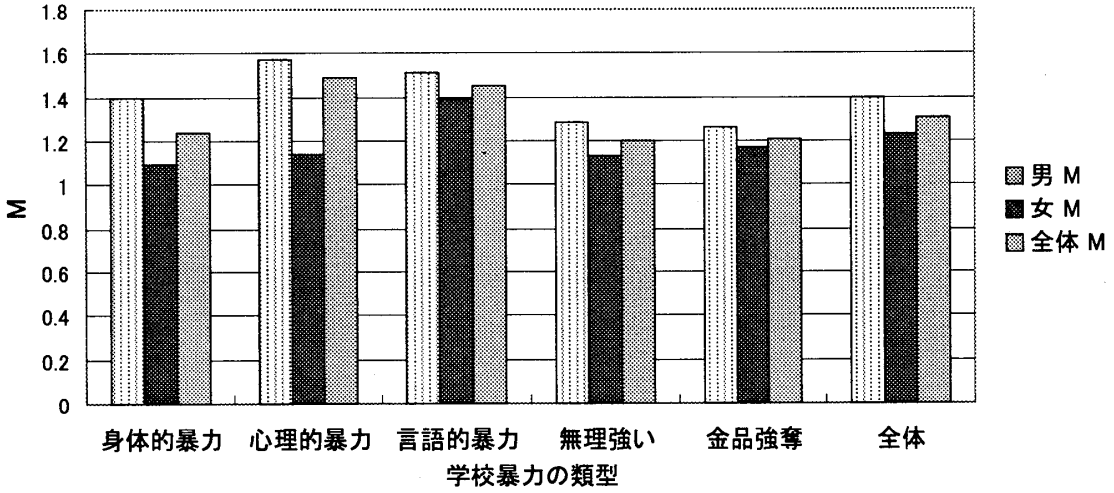

Fig.3　学校暴力の類型別による加害経験の男女差

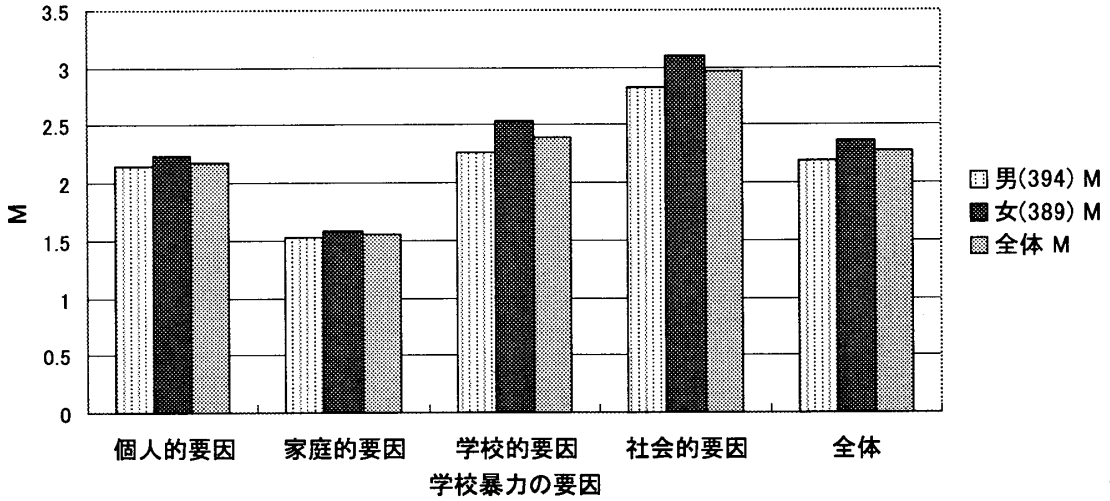

Fig.4 学校暴力の要因による男女の平均

Kerbs & Miller(1985)は暴力行動誘発要因を，生物学的，遺伝的要因，社会文化的要因，個人的要因，状況的要因，感情的媒介要因，認知的媒介要因とみたが，特に青少年暴力に係わる要因は，社会文化的要因，状況的要因，認知的媒介要因が重要である。

日本の大橋(1996)は非行原因帰属スタイルに関する研究で，非行少年は一般的に自分の過去の非行犯罪行為の原因を，自分以外の外部的要因に帰属させる傾向があると論じている。非行少年は非行・犯罪行為の原因を，能力，努力，性格などの自分の内的要因に帰属させるより，状況，運，他人，社会などの外部的状況要因に帰属されやすいと指摘している。そして，女子生徒が男子生徒に比べて，学校的要因と社会的要因がもっと高く現われたとしている。

本研究の結果からは，生徒たちのための文化空間の不足，学校周辺の有害環境，青少年に対する社会の理解不足を含めた環境領域と，教師の特定生徒に対する偏愛，厳格な校則，教師の体罰を含む学校領域において，女子生徒が男子生徒より敏感な反応を見せることと関係があると分析される。

学校社会事業の歴史が長いアメリカでは，生徒たちの暴力の問題を解決するために学校を土台とした多様なサービスと学校連携サービスの統合モデルを適用して，学校と地域社会の資源を調整し，より包括的なサービスを生徒に提供している。Allen-Meares & Franklin(1998)によると学校次元サービスは，生徒の問題の危険性を減らして生徒の潜在能力を増進させるためのプログラムの実行，生徒と親教育，生徒の対処能力と社会的技術向上，危機に処した生徒を援助するサービス，生徒の問題の予防と仲裁プログラムサービスが含まれると強調している。

日本における森川の研究(1998)では，スクールカウンセラーとして中学生のピア・サポート活動をマネジメントした取り組みを紹介しており，ピア・サポート活動の一つのモデルを提案している。滝（2002）は，日本のクラス風土にあったピア・サポートのプログラムを提唱している。クラス単位で自然に取り組めるような内容であり，クラス全体の学生の暴力・いじめ防止機能を高める上で有用であると思われる．野島(2003)は，エンカウンター・グループを通じて学校不適応，不登校生徒たちに直接的なサービスを提供するために，ファシリテータ養成をしている。

韓国においては1995年から教育部の学校社会事業試験事業以後，学校社会事業学会が組職され，生徒たちの問題解決をするための努力をしているが,学校暴力に対する体系的なプログラムや対処方案がない状況である。学校暴力が学校外より学校内で多く発生していて加害者や被害者がすべて生徒であることを認知する時，実践的・持続的な対策が望まれる。このような社会的要求や必要によって学校社会事業示範事業が施行されたし，学校暴力に対する部分的な学校社会事業家の介入があったりするが，残念ながらその活動が充分でなく，体系的なプログラムや対処方案がない。

終りに，学校暴力を経験した生徒たちの学校適応を助けるためには，学校，社会，国家の努力も必要であるが，もっとも重要なことは専門的なサービスを提供することができる学校社会事業の実践が成り立たなければならないと思われる。既存の学校暴力対応策は限界に到達しているため，学校社会事業家によって生徒-家庭-学校-地域社会が連携しながら，学校暴力に対処していかなければならない。このような学校社会事業の実践のためには，学校社会事業制度の必要性が強く求められているし，学校暴力に対する予防プログラムの開発と，日本でのスクールカウンセラーのような役割である学校社会事業家の役割の定立化と養成が，これからの重要な課題であると言えよう。

引用文献

Allen-Meares, P. & Franklin, C. 1998 Partnerships for better education: Schools, universities and communities. Social Work in Education, 20, 147-151.

Berkowitz, L 1974 Some determinants of impulsive aggression: Role of mediated associations with reinforcements for aggression. Psychological Review, 165-176.

Colivin, G., Tovin, T., Beard, K., Hagan S. & Sprague, J. 1998 The school bully: Assessing the problem, developing interventions, and future research directions. Journal of Behavioral Education, 8, 293-319.

文化観光部 1999 青少年白書，497.（韓国）.

Gottfredson, D. C. 2001 Schools and delinquency. Cambridge University Press: Cambridge, UK.

法務研修院 1996 犯罪白書，317-318.（韓国）.

Kerbs D. L. & Miller, D. T. 1985 Altruism and aggression. In Lindzey, G. & Aronson, E. eds., The Handbook of Social Psychology, 3rd ed., N. Y. Random House.

刑事政策研究院 1996 学校周辺の暴力の実態と対策，15.（韓国）.

慶尚南道昌原市青少年綜合相談室 1997 学校暴力の実態と対処方案―慶南地域中・高等学生を中心に―，7.（韓国）.

小嶋佳子・松田文子 1999 中学生の暴力に対する欲求，規範意識,加害経験・被害経験,および学校適応感．広島大学教育学部紀要第1部(心理学)，48, 131-139.

森川澄男 1998 学校の活性化への指数―学校コンサルテーションと学校資源の活用―．村山正治・山本和郎編，臨床心理士のスクールカウンセリング3

— 全国の活動の実際—，誠信書房，131-153.
野島一彦　2003　エンカウンター・グループのファシリテーター養成．村山正治編，「現代のエスプリ」別冊　ロジャース学派の現在，228-235.
大橋靖史　1996　非行少年はなぜ「楽観的」か，時間的展望の研究から—原因帰属の視点から—　犯罪心理学研究，34(特別号)，160-168.
下村哲夫　1996　いじめ・不登校　ぎょうせい.
総務省青少年対策本部(編)　2000　青少年白書(平成12年度版)．大蔵省印刷局.
総務省青少年対策本部(編)　2001　青少年白書(平成13年度版)．大蔵省印刷局.
滝　充　2002　ピア・サポートではじめる学校づくり　実践導入編　金子書房.